たかに

令和５年度　１月号

学校だより

令和６年１月９日発行

杉並区立高井戸第二小学校

新しい年を迎えて

校長 柴田 紀子

年が明け、気持ちも改まったところでした。テレビから流れたけたたましい緊急地震速報の直後、自宅にいた我が身にもその揺れが伝わってきました。遠く離れた能登の地で起きたその揺れに、ことの重大さを感じました。翌日には、羽田空港での着陸時の火災。接触した海保機はその震災地への物資の輸送をする予定だったとの報道。関わりある皆様へ、心よりお見舞いとお悔やみを申し上げます。と同時に、自分にできることは何かと自問を繰り返すばかりです。

これだけ IT の発達した世の中においても、予測不可能な事態は起こり得ます。その事態に遭遇したときに、どのように乗り越えていくのか、その力（レジリエント）は機を逸することなく、これからの学校教育でも担わなければならないと思いました。

学校では本日３学期始業式を終え、いよいよ、令和5年度を締めくくる授業日数53日間（6年生は54日間）が始まりました。令和5年度は、コロナ感染症が5類へと移行し、本格的に教育活動が行えるようになりました。巷では以前の活動を「再開する」向きもありますが、本校では「コロナ禍を経験したことにより再認識した、これからの教育の在り方“新たな学校教育の取組”」を始動しようと考えています。これまで、教職員はもとより、PTA、学校運営協議会、学校支援本部、地域の方々、SC、学校や家庭に関わる関係諸機関に学校の状況を伝え、課題を浮き彫りにしてきました。その一方で、子どもたちの声を聴き、その様子を見て、学校の存在意義を考えてきました。

そして、現時点における学校の存在意義を「学校は、既知についての答え合わせをする場所ではなく、未知と出会い、挑戦する場所である。」という言葉でまとめました。

現状では、既に答えが用意されている課題が与えられ、どれだけの知識があるかを点数として表される勉強をする機会が多い子どもたちの姿が見られます。「学び」とは、知っていることや知ったこと（知識）を活用して考えることで、さらに、新たな疑問や問いを見つけ、追究し、自分の考えを深化させることであると考えます。自分の生き方や考え方の土壌を耕す小学校6年間に、この「学び」を獲得する教育活動を行う責任が、学校にはあります。

令和5年度の自己評価や子どもたちの状況を基に、令和6年度は以下のことを重点に教育活動を展開していこうと考えています。

①課題に遭遇しても、なんとか解決して乗り越えようとする柔軟さとたくましさを育てること。

②どの人の考えも知ろうとする、その考えから自分の考えを高めようとする協働的な活動を行うこと。

③“自己のよりよい学び”に繋がる、一人一台のタブレット端末機の活用ができるような判断力をつけること。

3学期は、今年度の総仕上げであり、次の年度への準備期間でもあります。子どもたちの可能性が広がる令和6年度に向けて、今後も学校の取組を発信していきます。 今年もよろしくお願いします。

１月の生活目標『自分からすすんであいさつをしよう』

新しい１年が始まりました。今月の目標は、「自分からすすんであいさつをしよう」です。あいさつは、他者とのコミュニケーションの第一歩です。日本語であっても、外国語であってもまずはあいさつから会話は始まります。年の初め新しい気持ちで、自分からすすんであいさつをすることにより、気持ちが前向きになり充実した一年を過ごすことができるようになります。高二小の子どもたちの様子を見ていると、決まった場面で決まった人に対してのあいさつはとてもよくできています。反面、あまり慣れていない場面でのあいさつはどうしたらよいかわからなくて沈黙してしまう、ということがあります。いろいろな場面であいさつができるように学校とご家庭とで協力して声をかけていきたいと考えています。気持ちのよいあいさつのあふれる学校にしていきたいと思います。今年もよろしくお願いします。